

絵本をつくる

34期生

I テーマ設定の理由

近ごろちょっとした絵本ブームになっていますが、私も今年になってから、絵本原画展や絵本展示会などに行く機会がふえました。今までただ絵本を眺めて楽しむだけでしたが、細かいところまで見れるようになって、実にこまやかな工夫がされているなあという驚きや考えさせられるものがでてきました。そこで、この夏休みに私も自分の絵本をつくってみたいと思ったわけです。

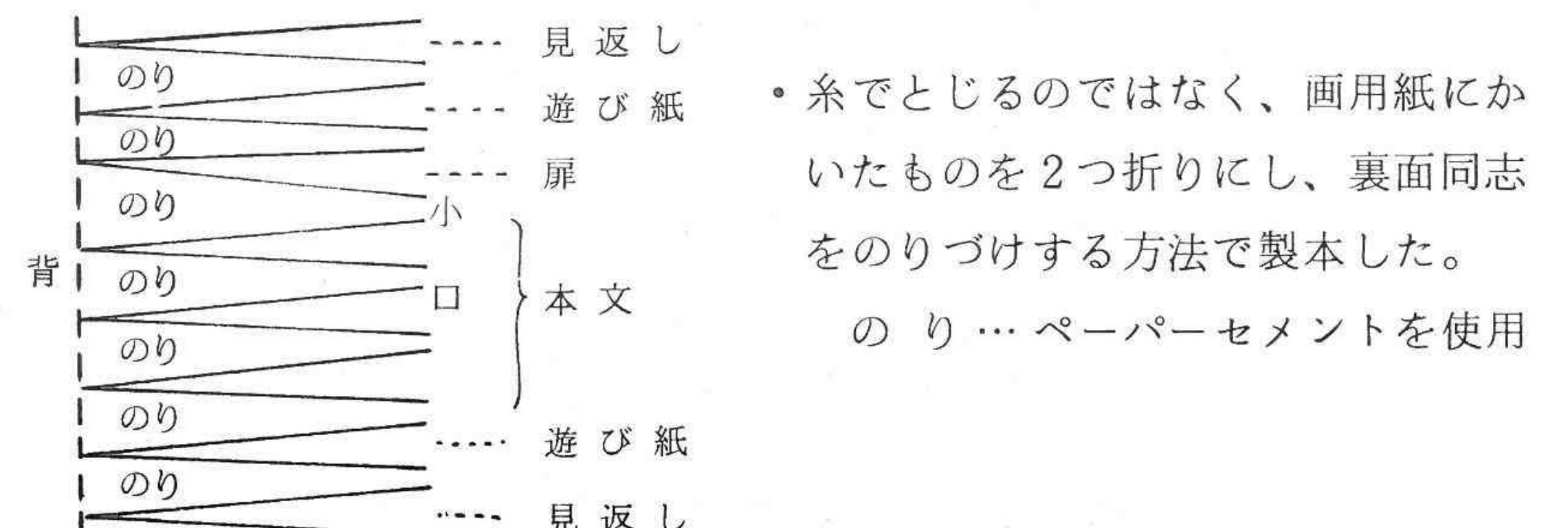
II 研究方法

- (1) 話、全体の流れの構想を練り、ラフスケッチを繰り返す。
- (2) 画材を選定して、“自分の絵”を完成させる。
- (3) 製本
- (4) できたら「全国手づくり絵本コンテスト」に応募する。

III 研究結果

- (1) 構成 ……・文字なし絵本
・「～してみたら」という言葉の中から「とんでみたら」を選び抜いてこれを題名にした。とんでみたら何が見えたか、という主題で2枚1組合計10枚で構成。
- (2) 画材 ……・画用紙…ワトソン水彩紙
・絵の具…水彩絵の具
・小筆の先を切りとったものを使いこれで面を点々でうめしていくやり方でかいた。
- (3) 製本 ……・絵本作りの基本、製本の仕方は大阪デザイナー学院で教えて頂いた。

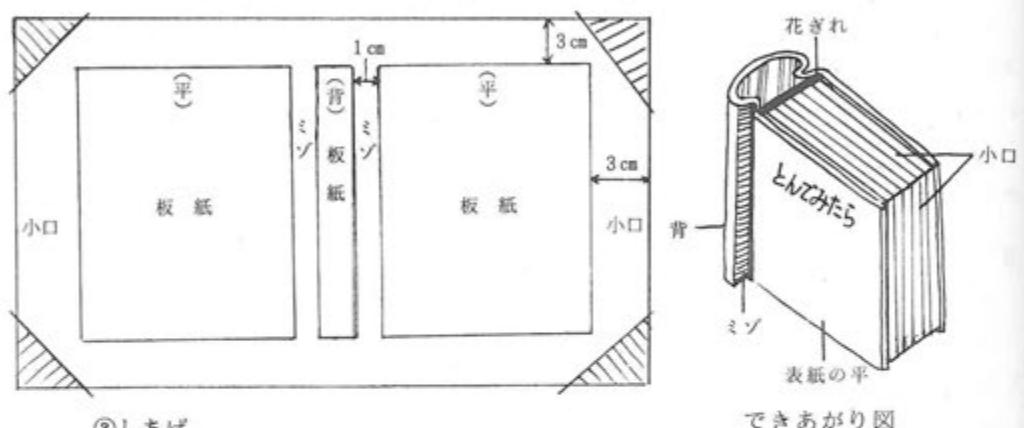
①本文



- ・背固め（本文の背にのりを厚くぬる）をし、三方の小口をきれいにカットして、寒冷紗、花ぎれをそれぞれつける。

②表紙

- ・表紙は中身を保護する役目があるので厚みのあるしっかりした紙でつくる。板紙（ボール紙）を絵のかいてある紙で包む。
- ・表紙は本文よりチリ分だけ大きくなっている。

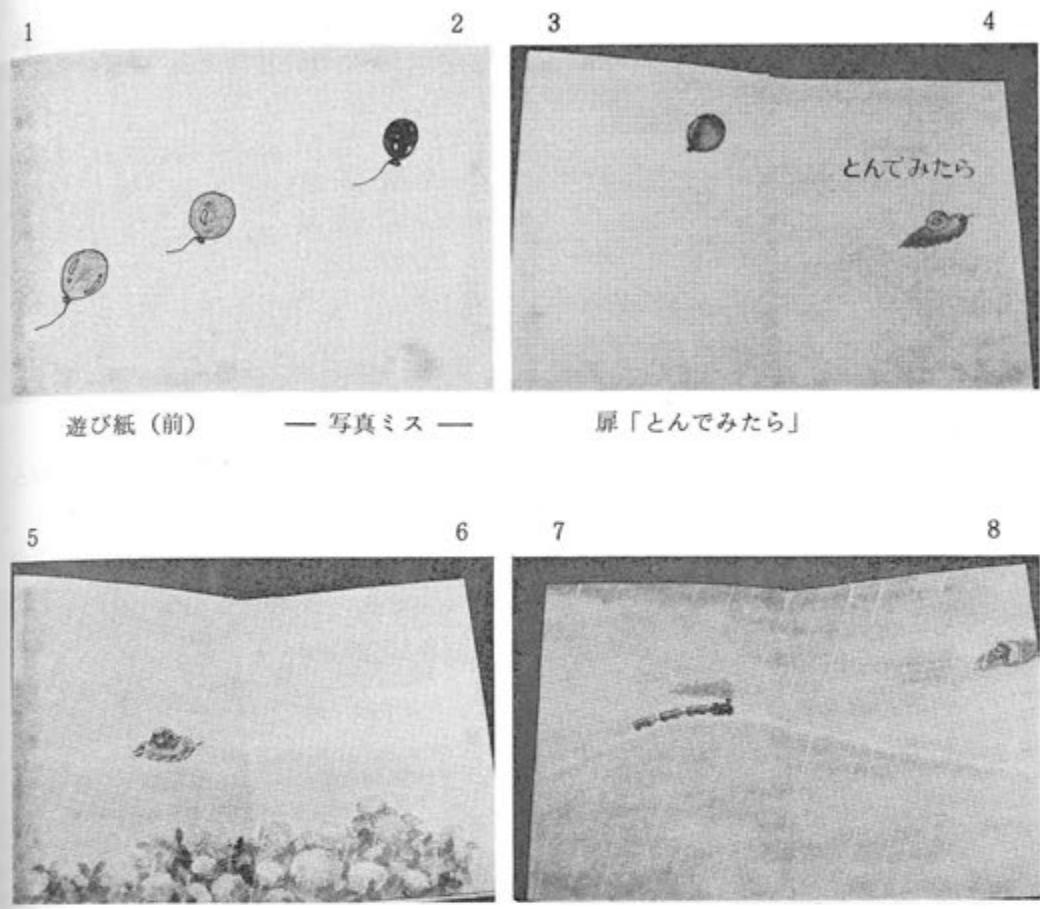
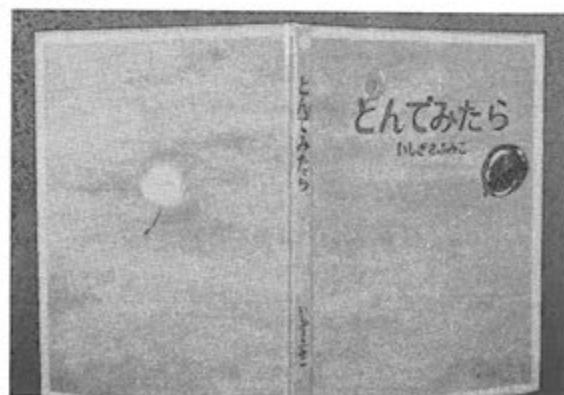


③しあげ

- ・ミゾを処理して重しをおく
 - ・本文の紙の泣き止め…トリバブを使う
 - 表紙…ビニールシートをくるむ。
 - ・なお表紙、扉の題字はレタリングデザインより使った。
- 以上が絵本のつくり方である。

絵本『とんでみたら』

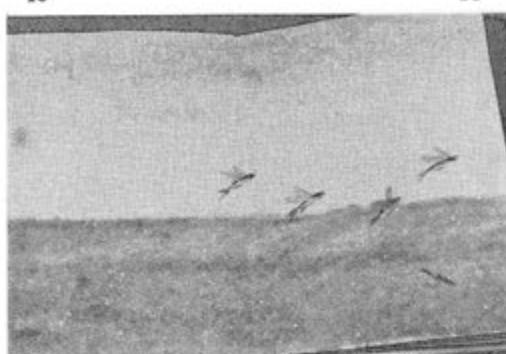
大きさ 天地32cm、左右24cm(じて)、厚み2cm
(表紙)



夜、森の中、ふくろうの子が、
とんでみたら――。

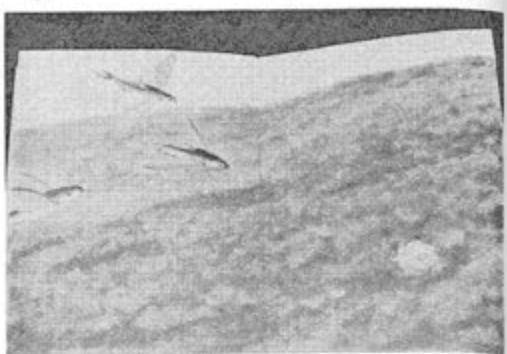
サングラスを見つけたふくろうは昼間でも
目が見えるようになった。

13



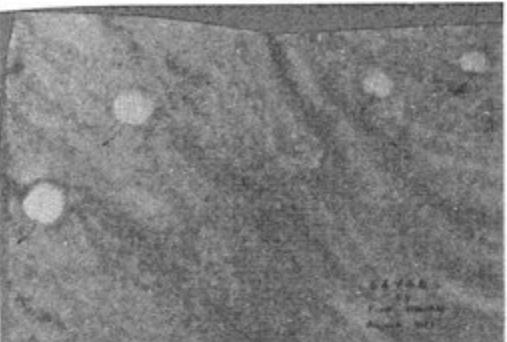
とびうおが海原を
とんでみたら——。

14



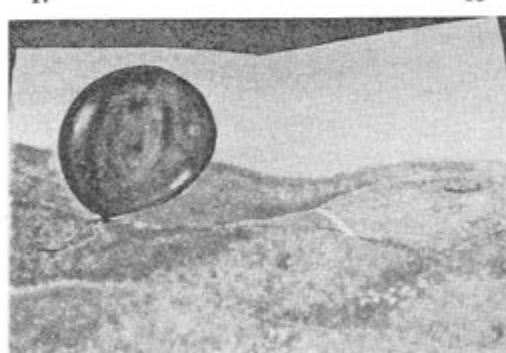
ピンク色の手紙の入った
ピンをみつけた。

15



おわり 遊び紙（後）

17



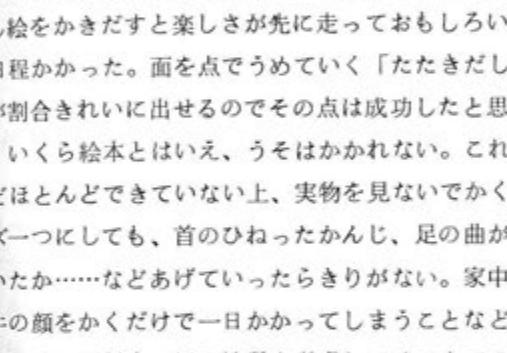
春、どこまでも続く丘、青い空、
赤い風船とんでみたら——。

18

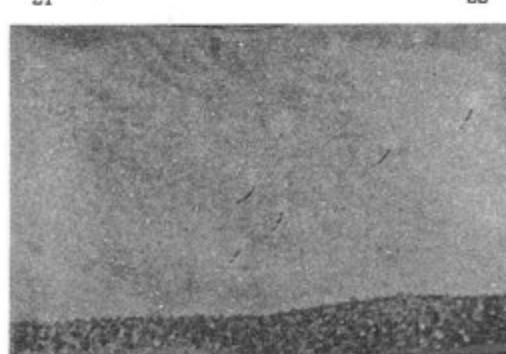


牧場に牛の親子、小さな男の子が
見えた。

19

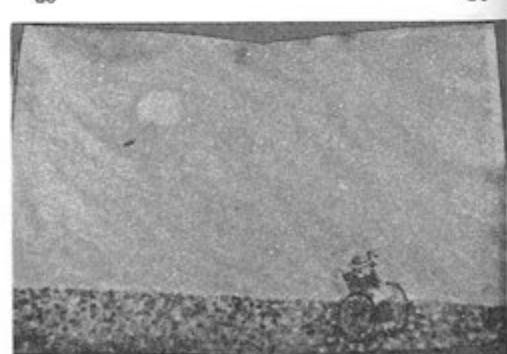


21



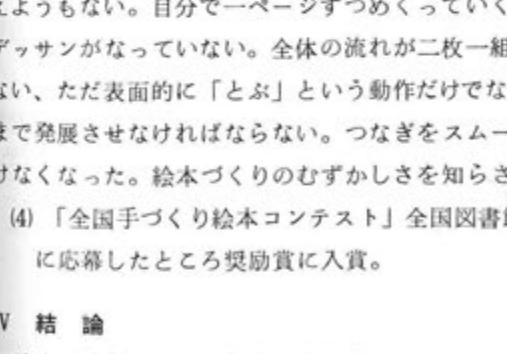
たんぽぽのわたぼうし、
とんでみたら——。

22



たんぽぽの花の中に
車イスの女の子見えた。

23



IV 結論

絵本づくりにおいてわかったこと

①絵本の絵と普通の風景画のような絵とはまったくちがう。

絵本の絵にするために何かハッとするようなものはないかと、常に考えた。写真的になってしまっていけないしマンガチックになってしまっていけないし。“自分の絵”をかくというのはなんとむずかしいものだろうかと思った。個性のある絵、そして絵本には程遠いものになってしまった。

一枚の絵が出来上がる寸前に失敗したり他のいい案がひらめいたりしたときは本当にくやしかった。それであきらめたものが多数ある。ラフスケッチを徹底させてもっ

と時間的に余裕を持って作りたかった。

この絵本でてくる5つの構成はすべてその時にパッと思い付いたものばかりである。だから最初の構成とはまったくズレてしまってほとんどがぶつけ本番という感じだった。いったん絵をかきだすと楽しさが先に走っておもしろいように進んだ。一枚の絵をかくのにおよそ2日程かかった。面を点でうめていく「たたきだし」の用法はとても時間がかかったが、ほかしが割合きれいに出せるのでその点は成功したと思う。

いくら絵本とはいえ、うそはかかれないと。これが一番痛烈に感じたことである。デッサンなどほとんどできていない上、実物を見ないでかくというのは非常に苦労した。例えば牛のボーズ一つにしても、首のひねったかんじ、足の曲がり具合、お乳はいくつか、めすに角ははえていたか……などあげていったらきりがない。家の図鑑や絵はがきや切り抜きを探していると牛の顔をかくだけで一日かかってしまうことなどあった。

初めての製本。紙の性質を考慮してその上でのりなどが決まる。製本中に紙がのびて、ムラができるというのが一番怖いのである。また寸法は $\frac{1}{10}$ mmでも狂ったら全体にひびいてくる。何から何まで緊張のしどおしで三方小口カットのときは手が震えた。製本は2日くらいで済ませてしまったがもっと時間をかけるべきだった。それでもやっと出来上がったときの喜びはたとえようもない。自分で一ページずつめくっていく時のあの快感。……しかしそれもつかの間、デッサンがなっていない。全体の流れが二枚一組ではぎこちない。ハッとするようなヤマ場がない、ただ表面的に「とぶ」という動作だけでなく、「人間にとってとぶとはどういうことか。」まで発展させなければならない。つなぎをスムーズに……などなど厳しい批評があり、急に情けなくなった。絵本づくりのむずかしさを知らされた。私の考えは甘いなと思った。

(4) 「全国手づくり絵本コンテスト」全国図書館協議会主催 9月末日締め切りに応募したところ奨励賞に入賞。

絵本という1つの世界において1つの流れのもとで一枚一枚の絵があるのだ。

②つながりがスムーズであること。

つながりがあるからこそ、絵本は1ページ1ページめくっていきたくなる。そして後で1つの感動があればいいのだ。1枚1枚の絵が一貫性をもっていることが大切である。

③構想を練る段階が一番大切である。

そして、ラフスケッチを繰り返し重ねていく。

④個性のある絵本。意外性のある絵本。

⑤製本は時間をかけてじっくりやる。

寸法はあくまでも正確にはかる。

⑥主題をはっきりさせる。

どのページにも奥深い意味が流れ、また1つのヤマ場をつくる。

V 総 括

自分で絵本をつくってみてから、どんなささいな絵本でも、なるほど、さすがだと思うところがたくさんでてきた。つなぎの工夫、ヤマ場、細かい所では見返しの色、製本の仕方、花ぎれの色などどれも洗練されている。このうすい絵本にどれだけの苦労と時間が費やされただろうと思うと、幼稚園からの絵本もますます手離し難いものになった。絵本といううすい紙に、それぞれの人が、自分の世界をつくろうとしている。絵本は1つの世界という言葉の意味がよくわかったような気がする。

この夏休み、何もわからずただ夢中でとりくんだけでまったくぶっつけ本番であった。構想を練るのに夏休みの半分程使ってしまい、その間にどんどん変更していった。最初は“文字あり”にしようと思って話まで考えていたが急に文字なしにすることに変わり、始めから考え直した。“とんでみたら”“もぐっていったら”“あけてみたら”“のぞいてみたら”……と、限りなく題材は出てくるし、その中で5つを設定するのにさんざん迷い、悩んだ。もっとびっくりするようなおもしろいものはないかと、始終求め、なかなか決めてしまうことができなかった。やはり構成がもっともむずかしく、苦労したところである。私のはドタバタしてただ完成させることに必死だったから、まったくぎこちないつながりのないものとなってしまったよう思う。全体の流れとして、どのページにも共通部分をうながしたらよかったです……などいたらない所が多数ある。

入賞の通知を受けたときは、心から絵本を作ったよかったですと、思った。また、来年も取り組んでみたい。そのためにも、今からアイデアを集め、ラフスケッチを始めようと思う。そして、何かの拍子にふとひらめいたものを大事にしていきたいと思う。